

研究活動報告 — 1 —

## 新しい「病院のサインデザイン」の提案

—リハビリテーション病棟における試み—

坂田 岳彦\*, 宮島 朝子\*\*, 見寺 貞子\*\*\*  
瀬能 徹\*\*\*, 小山 美代\*\*\*\*

### サインとは

サインデザインの歴史は、1920年代にオーストリアのOtto Neurathによって提唱されたアイソタイプ(International System of Typographic Picture Education, ISOTYPE)に始まる<sup>1)</sup>。これは統計図表をピクトグラムと呼ばれる絵文字で表したもので、事前学習なしでも視覚的に理解できるという利点がある。東京オリンピック(1964)では競技種目と会場案内にピクトグラムが使用され、言語の壁を克服するものとして高く評価された<sup>2)</sup>。

人間の安全を守るのもサインデザインの重要な役割である。わが国では1972年に大阪と熊本で起こったビル火災が契機となり、非常口のサインに子どもや外国人にもわかるピクトグラムが使用されるようになった<sup>3)</sup>。このようにサインデザインの役割は公共空間の標識、統計グラフや地図、機器類の操作表示などきわめて広範に及んでいる。

### 新しい「病院のサインデザイン」の提案

サインデザインは目的により表現の仕方や設置場所が異なる。病院のように年齢層の異なる人や疾病を抱えた人の集まる場所のサインデザインには、一般の公共施設や商業施設以上に優しさ、安らぎ、心地良さなどが求められる。また、療養環境に適したユニバーサ

ル性の高いサインが工夫されてこそ、患者の安全や家族の安心が約束される。

研究対象とした公立リハビリテーション病院慢性期病棟では、サイン表示に小さな文字の淡色デザインが使用されており、高齢者には見づらい状況にあった(写真1)。そのため看護師が矢印や部屋番号を大きく書いた紙を壁に貼ったり、床面に蛍光テープを貼ったりして対応していた(写真2)。また、地誌的障害を有する患者の中にトイレから自室へ戻れない人もいたため、病室のドアや名札に個人の好きなぬいぐるみをかけて目印にしていた(写真3)。しかし、大人に対



写真1 見づらい誘導表示

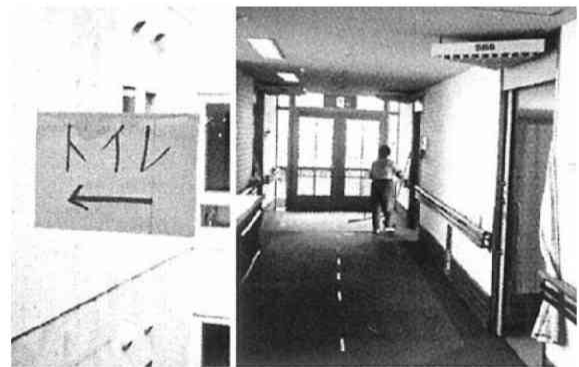


写真2 手書き表示と蛍光テープによる誘導表示

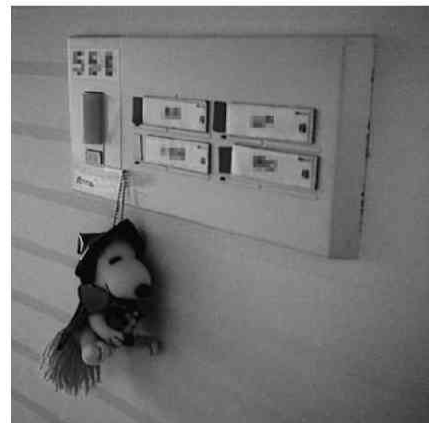


写真3 ぬいぐるみを用いた表示

\* 京都嵯峨芸術大学短期大学部美術学科  
〒616-8362 京都市右京区嵯峨五島町1番地  
Department of Fine Arts and Design, Kyoto Saga Art College

\*\* 京都大学医学部保健学科看護学専攻  
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53番地  
Department of Nursing, School of Health Sciences,  
Faculty of Medicine, Kyoto University

\*\*\* 神戸芸術工科大学デザイン学部ファッションデザイン学科  
〒651-2196 神戸市西区学園西町8-1-1  
Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Kobe Design University

\*\*\*\* 兵庫県立総合リハビリテーションセンター家庭介護・リハビリ研修センター  
〒651-2181 神戸市西区曙町1070  
Training Institute for Home Care and Rehabilitation,  
Hyogo Rehabilitation Center

受稿日 2006年9月12日

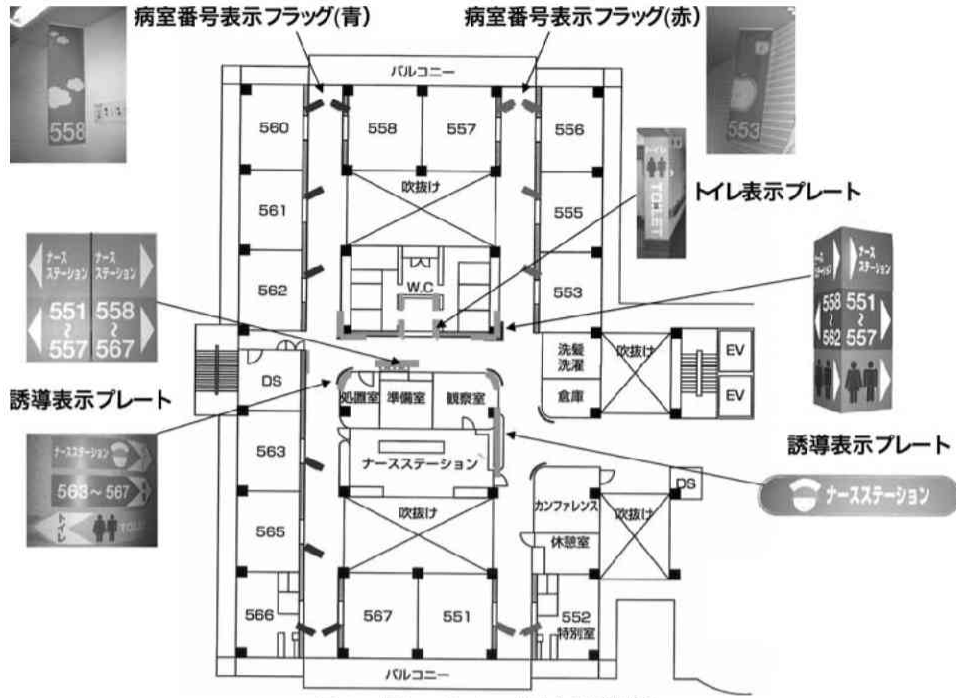


図1 新しいサイン表示と設置場所

してぬいぐるみを使用することへの抵抗感や、家族の心情を傷つけているのではないかとの思いもあり、現場では改善案を模索していた。

そこで、あらゆる人々にとってわかりやすくユニバーサル性の高いサインデザインを考案し、トイレ表示プレート、誘導表示プレートおよび病室番号表示フラッグの新しい3種類のサインデザインを提案した(図1)。多くの病院や施設では床、壁、天井とも無彩色が多く使われ無機質な印象を与えている。そこでやわらかいトーンの有彩色を使い、優しさ、安らぎ、心地よさを演出した。文字は遠方からの視認性をよくするため、従来のものより大きく、和文は中太のゴシック体、数字と欧文は中太のサンセリフ体を使用した。

各々のサインの設置は車いす使用者にとっても視認性のよい高さとした。

### 1. トイレ表示プレート

従来のトイレ表示プレートは金属質のため、逆光になると暗く順光では反射して見づらいこと、高い位置に設置されているため車いす使用者の視点からは見えにくいことが指摘されていた(写真4)。そこでトイレ入口の壁の厚み部分に、難燃抗菌素材の発泡スチレンを使用したプレートを設置した〔(側面 H1, 800×W430 床面からの高さ2,100)、天面 (2,795×430)〕。文字は大きく表示し、色は黄色 DIC<sup>(注)</sup>56 を使用した



写真4 従来のトイレ表示



写真5 新しいトイレ表示



写真6 病室ゾーンの誘導表示

(写真5)。

## 2. 誘導表示プレート

この病棟では、トイレをはさんで左右両側に病室が配置されている。そのためどちらに行けば自分の病室に帰られるかを迷う患者もいた。そこで、トイレから出た正面の壁に向かって左側を赤ゾーン、右側を青ゾーンとする表示プレートを設置した (H330×W330) (写真6)。赤は DIC76, 青は DIC141 とし、色覚に障害を有する人にも視認しやすいとされる配色を採用した。また、誘導において最も重要とされる曲がり角には、難燃抗菌素材の発泡スチレン製の誘導表示プレートを設置した (H330×W330, H250×W1,200)。色は緑色 DIC175 を使用して目立つ配色とし、大きな文字でナースステーションと表示した (写真7)。

## 3. 病室番号表示フラッグ

各病室の番号表示は入口上部に設置されている。し



写真7 コーナーの誘導表示



写真8 高い位置にある病室表示

かし車いす使用者から見てかなり高い位置にあり文字も小さいため、表示機能を果たしていなかった (写真8)。そこで安全を考慮して難燃素材の布製フラッグとし、進行方向から見えやすいよう壁面から60度で張り出し天井から吊した (H1,000×W330)。フラッグはわずかな風でなびくため、無機質な病棟空間にはちょっとした安らぎになるのではないかと期待もあった (写真9)。

## これからの「病院のサインデザイン」への提言

サインデザインはまだ未成熟な分野である。色、文字、材質、場所などをいくら考慮しても、いざ設置してみると想定外の問題が起こることが多く、全く欠点のないサインを制作することは至難の業である。また、一旦設置されると変更することも難しい。しかし病院においては、患者や家族、医療者にとって何か不具合が起きたとき、管理者側がカスタマイズできるようなシステムを整備し定期的に検証するなど、継続したアフターケアをしていくことが必要であろう。

今回の設置は空間サインのみであったが、サインを必要とする場所はほかにも多くある。医療機器の操作方法や投薬の仕方をピクトグラムで明示することがその例である。医療の現場はさまざまな職種や多くの人が関わる。そう遠くない将来、諸外国の医療従事者を受け入れる時代がやってくるとも言われている。その意味でも、言語の違いを越える優れたサインが必要になってくると考える。

## おわりに

デザインという言葉は de+sign からなっている。'de' は細かい領域に分けるという意味があり、サイン



写真9 フラッグを用いた病室表示

を細かい領域に分けたのが今日のデザイン領域である。つまり、サインはすべてのデザイン領域に関わるものである。優れたサインを制作するにはデザインそのものを総合的に捉えたり、他分野の専門家が横断的に関わって考えたりすることが不可欠である。今回の提案はデザイン、看護、医療、福祉といったさまざまな分野の専門家が集まって検討したものであり、新しい「病院のサインデザイン」を考案した意義は大きいと確信する。

(本研究は財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団の助成を受けて行った研究の一部である。)

## 謝 辞

研究に御協力をいただきました病院関係者の皆様に深く感謝いたします。

注) DIC: 大日本インキ化学工業(株)の指定色

## 文 献

- 1) 江川 清: 記号の事典セレクト版 第2版, 東京: 三省堂, 1991; 99
- 2) 前掲書1), 97-98
- 3) 前掲書1), 198